書畫法示

一卷

詞苑叢書

Murasaki Shikibu
"
[Kyoto, 1654]

[v. 1]

PL 788
.4
.G4
1654
vol. 1
copy 1
Asian
Japan
Case

3004551302

深氏誕生より十二戌まで

いづれの御時(おほんとき)にか、ぬ御更衣(ねうごふ)あまたさふらひ給ひ
なかにいとやむごとなきはなきあらぬが、
すぐれてときめきたまふありけり。はじめより御
桐壺更衣
くとせひはづりのへる御かたがためざましきもの
におとしめそねみ給ひおほし。ほどそれよりも
下(げ)らうの更衣(ふい)たちはましてやすらぬあさゆふ
のこやづへにつけても。人のこころをうごかし。う
らみをおふつもりにやはりけむ。いとあつしく
桐壺更衣
なりゆきもの心ぼそげにさとがちなるを。いよく
あつぎあくれなるものにおほして。人のそし
内心
りをもえはばからをおもひ。世のためしにもなり

ぬべきれもてなしなりかんだちめうへ〳〵なども
あひるくめをそばめつくいとまばゆきへのれ笑(おが)て
なりもろこしまもかうてとれをぐりまゐて世も
えぐれすしりそれとやうくなめれしるこりも
うぢきなうへのもてるやこぐさまなりて揚(やうき)
妃(ひい)のためしもひきいではべうなりゆくまいと
川こるきことおほれどかくしけるきれ心(ミ)げへの
たぐひるきをこれこまてまぐらひもちれ大納(ごいなごん)て
いるくなりてぱくれのくるなんいりしへのへのうしあ
かまておやうちぐしさしなりて世れ笑(おが)て笑(ゑな)
やかれるれりこぐまもおとしぬなぐのぎしれ

桐壺文衣心

ともなてゐしかれどさりぬてはずくし
きれうしろうしなれバことあるなれバをより
取るく心ぼそげなりきさきの世にもれらぎりやゝ
りそん世まるくきよらなるたまれおのこみこ
さへむまれのぬいつしと心もとるがらをなて
いそぎまいらせて御諦ずるに笑づらるるちご
のれうちなり一のみこハ右大臣のめれのれはら
にてよをおもくうるがひるまうまうけのきみと
世にもてうしづき罪ゆれどこれれにおひにゐる
びのべくもあらざりそれバおほうるのやんごとれき
れおもひにてこのきみとバわるくしものにおほし

（朱雀院）（源氏）（源氏）（源氏）

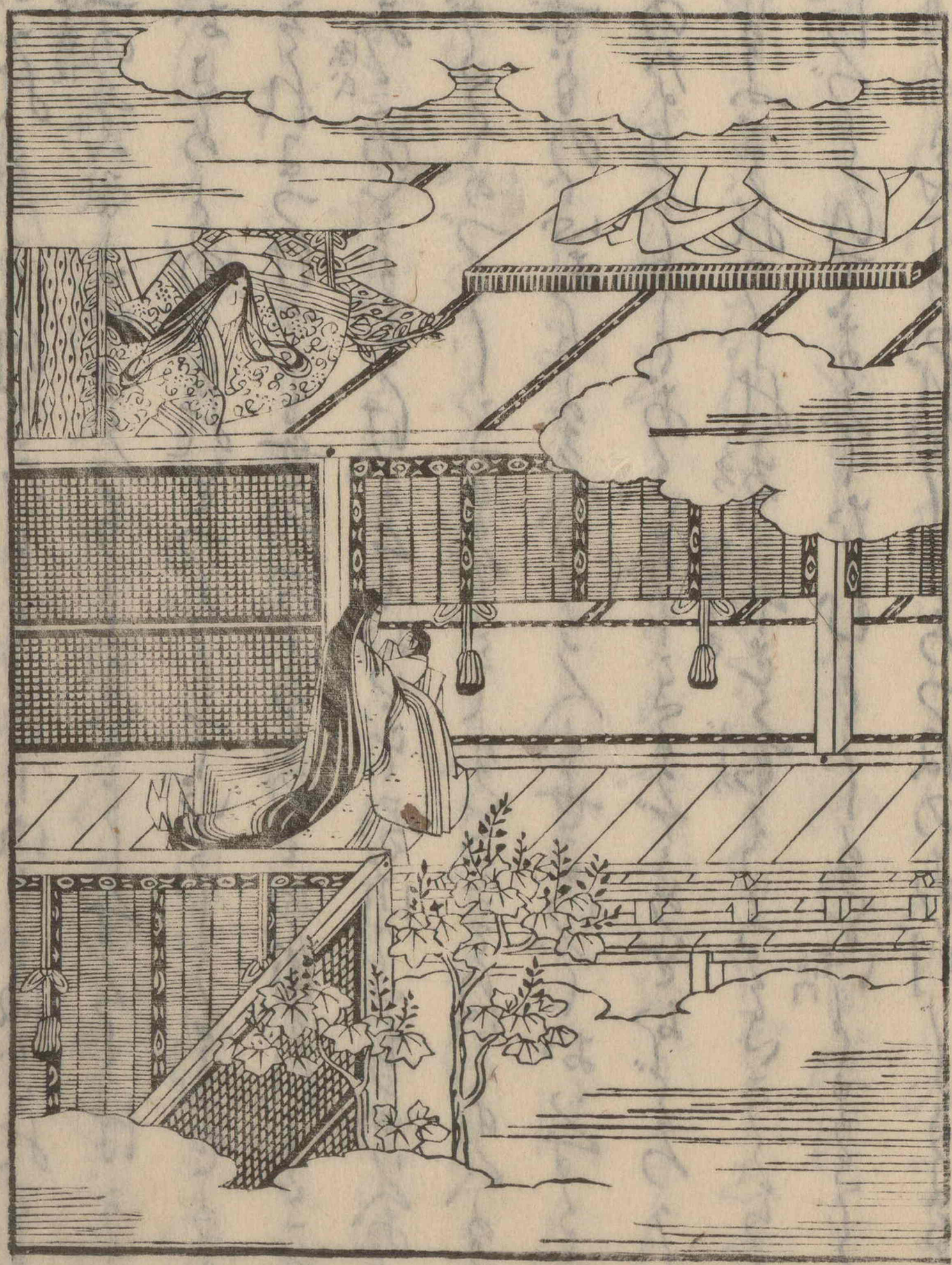
りづきのすゑがきりなし。(夏衣)たじめよりをしなべ
てのうへ(三や)家づかへしのべきなれはあらざりき。
おぼしいとやむごとなく上(じやう)ぜめしかれど。ひり
なくまほそさせのすゑまりは。さるべきにあそびの
おりく。なまぐるまもゆへあることにはなしくは。
まげまうのがしをのふ。あるは(とき)はまおほとのこ
もりすぐしてやがてさふらはをのなど。つるがち
におまへさしぎもてなさせのし程(かど)よ。そのづから
うろきうるまもみしじを。これ(源氏)こゝ世まれのて
のちはいと心ことなおもほしをきてこれは。惰(たう)にも
ようをぼ。これ(源氏)みこれ升のべきなめりと。一乃(いち)

朱雀院

みこのめ(ねうご)れハおほしうこゝろ。人よりさゝさる
まいりまてやむごとなきれさひなべてなしず。
みこたちなどもおいしまをバ此(この)れうこのれいさめを
のこそなをわづらいしく心ぐるしうさひ(さこ)笑させ
まけるし(文衣心)こゝきれ(ミ)けをバたのこゝさてながし。おと
しめさずをもとめまふ人をおほく。ヴ方ハよ
りくもれたるまさなりさ後まてゝおかくるるもの
おもひをそ志のふれ(ミ)つゞねハさりつゞるり。このまく
のれうごくをすぎさせまつ。ひまるまきれまへ
たりま人のれ(ミ)こゝろをはくしまもげまことハり
とみしらまうのぞりまにも。のまりうち志さる

弘徽殿女御

おりくはうはりしわる殿（どの）ぞくりこれこちらり。
なやしきわざをしけれ。はをくり世人の人のさぬ
のまとそこへがこう。まきるまきてとぐもあり。又あり
時はえさらぬめだうのとをさしこめ。こるこるる
心をあらきて。いしこるめわづらをも時もおほ
りことまふれてるかずしらぬくらしてのこ
まきれば。いといこうをひわびこるはいとぐ（はい）のれと
はだ（ごら）ん じて。後涼殿（こうりやうでん）まもとよりさふひも更（ふ）衣
のぎうしをほうまうけさせまてうへつぎのまた
まはずそれうしみましてるやらんなるなし



これ（源氏）ここ川になりまとし。これ（ら）海ぞれこと。
一の（朱雀院）（ミヤ）ましてまつりしまをとしぞ。くらばうき。
おさめとのゝもれをつくして。いとじうをきせまふ。
それにつけても世のそしつとのゝおほかれど。これ
一 みこ（源氏）のをまをけもておいまてゐ。これらもちゝじゝあり
がくめづしきまでこしまをえそねゝあへまハ
ずものゝ心しりまへハかゝる人も世にいでおいするも
のなりそりとあきまりしきまでめをおどろし
まふ。それらしれ夜（なつ）ごや（桐壺更衣）せ（どろ）ゐるまきこちに
わづらひて。まくでなむとしまをいと（沈門）まきる
ゆるさせまいぞ。らしじろつねのあげしさまるり

のみれば、ばめなれて、れしがしころみよとのさまハ
すまま、日（実衣）ごまをもりのそ、ぐ又六日ハほどる
いとよいうなれば、ぐらぐざみるくくそうして、
まうでさせしてまつりのふ、うるおりまも
あるまじきさまぢもしそと、ころばひ
しそ、みこ（源氏）をばとぐめさてまつりて迎びて出のふ、
門ぐりなれば、されこもえとぐめさせのすぐれ、後
じだまをくらぬおぼつれさをいふるまく
おぼさる、いと（実衣）まかひやうまうけらしげるの人の、
いさうおもやきていとなれとおをさひしみ
なぐらしとまいでしも、罪（きこ）人やしぐ、あるうるさう

まさていりつくもれしのをはらんずるまこさし
うゝ川末おぼしめされず。よろ川のことをるく
くちぐちのゝ夜ハすれど。はいへもえこさてしの
ハず。まゝなどもいとたゆ者まて。いとゞなよく
とかれのゝしきまてふしこれば。いうさまにと
おぼしめしまどはるゝてぐるまのをんじなどの
のりせても。又いしをのてハさらまゆるさせのハ
ず。かぐさりあらんみちまも。とくれさきだらじと
ちぐらをのけるを。さりともうはすてハえゆ
きやらじとののハするを。ぬもいというじと
こゝてまつりこる

1六

文云 りぎりとてわかる屋のうるしさまいかま
ほしきを命(いのち)ゆかり。いとくさふのへましけば。
いきもたてつきてまほしげなるとは
ありげなれど。いとくるしげまゆげなれバ。(此門心)
るぐらともかくもるらんをれらんじとてんとれ
ぼしめすまゝふかじむべきいのりどもさうべき
人ごうけしまハれるとしよひよりと四九いそが弱
ぞわりなくおもほしるぐらまうぞさせのひけれ
むねのこほとふるぐりてつ極まどろまれぜこのしる
かねさせのれつるひのゆきかふほどもるさまる後
いぶきをかぎりなくののもをつるを取るうち

すぐるほどなんだ（文衣）にてのぬるとてるさきは
げばれつひもいとあへるくてくりまいりぬぎ（九行）
こしめ寸れ心まどひるまぐすもおぼしめしわら
れぜこもりおいします（源氏）みこハくてもいとれらん
ぎまほしかれどうらほどなさふしひのれいるき
てとなれバすぐのなんと寸るまごとうあらん其
おもほしたらずさふしぬ人ぐのるきまどひ（九行）うへも
れるこぐのひまるくるぐれおいしますを（うつ）やしと
こしてまつりのへるをうしきてとまぐる
うらわれのるしうしぬてるきわぐるるをま
して何られまいふひるしうぎりなれバ稱いれ

さほうはおさめてまつるをもくふのこおれじ
ふりはものがりなんとるさこゞれもて此をそう
の女房(ねうとう)のくる夜はしるひのりもてをこゞさといふ
所はいといめしうそれさほうしるうはたくし
つきたることちいゞぐりゝハありけん哉るしき
此ゝをこゝろく程おもすものとしふがいとうひ
なれば〻ひはなりのいんをこゝそまつりて今ハ
るきへとひこゝるはしひなりなんとさうしう
のもつれどくるまよりおらぬべうまどひのへばさ
もしひけりしと人ごもてわづらひ(さこ)つゝ(内裏)うちより
此はひあり三位(ミつ)のくゝねをくりのりし勅使(ちくし)さ

てぞれ宣命(せんみやう)よむるんかるしきことなりかゝ女(ねうご)れと
だまいくさびなりぬかがあらずくらおしうおぼ
さるれバいまひとさざみのくらゐをごまとをくら
せのなりそり長まつけてもふくゝの人ぐおほ
かり和おもひ志りのふハさ海かたちなどれめでさ
かりしてと心だきれちぐらかまめやすくふくみ
がたかりしるなどいまのぞおぼしいづかさ海何し
きれもてなりしゆへよそすぎるうそ○こゝのしが
人がられあられまなきけ何りし(れ)心をうへ(れ門)の女房(ねうぼう)
ども(こひ)志のひあへりなくてぞとはかるおりま
やとみしたりパるく日にすぎて後(のち)のわざるもよも

こまかにとふらいせのふほどかるまゝにをんかる
なりかるしうおぼさるゝにれうごくのとれ井
なども無てしゝのいぶ。こゝるゝにひらてあ
しらきせのへ。ぶこゝてまつる人さへ霧(司)かさ秋(あさ)
なりなるさなとまでて人のむねあくまじかりかる
人のれおぼしれとぞ。弘殿(こうきでん)などにはれ(おを)ゆるし
なうのすける。一(れ門心)の家をこゝてまつるをかふにも
わうこや(源氏)のれ(こい)悪しされこおもほしいでつ。しるこ
しきめ(ねうぞう)所。れめれとなどとつかりつ。なりさ後
をさしめ寸。呼(の)かぶ(ぶ)ぬちるにはかまいるさむ
きり(ゆふ)蔦(ぐれ)れほど。つ(れ門心)ねかりもおぼしいづると

おほくて。ゆまひの命(ミヤウ)ぬといふを川かれ。
夕つく夜(よ)のおりしきほどまいぐしてさ物
まふてやぞてなぐめおりしますうやうのおりは
れあそびなどきせもしに心ことわりおのひを
うきゐるしきてしまることれ葉(そ)も人かりはこと
なりしけりひかちれおもげまつとそひてお
ぼさるくまもやこのうつはるをとりかり命(ミヤウ)
ぬりしこままりぞつきてぐどひ(車こ)さいるくりけハ
ひなれるりやもめずこなれど人ひとり(実衣ノ事)のれし
づきまとかくつくろひさてめやすきほどま
てすぐしまつるれやこまくれきるかしまへる

1九

ほどまくさもたくなり。ぬしかまいとぐあ秋
たるこちらして。月のげぐりぞ。やへむぐらにも
さりぜさしへたるみるゝおもてまわろして。
はぐぎみとゝまえもれもれのぞ。いまゝぐ
とまり侍るがいとうきをうらかれつひのかも
ぎゝれつ程日け入まつけても。ちぐしう
なんとて。げまえたふまじらかいまふ

令嫁詞
まいりてはいとゞ心ぐるしう心ぞもはらるやう
まなんと関侍(みいし)のまたけのそうしたまひしと
もれ思ひまへしてぬるゝ法まもげまこそいや
しのびがたう侍られとて やゝためらひておほ
せごとつゝ事ゆ しぐしはゆめとのこたどら
れしをやうくおもひしげまうしもさむ屋
きるなくしへがうさはいうますべきわざかな
ともとひあくすべきんざまなきをしのびて
はまいりまなんやわうやのいとおぼつるく寝
けきなるますぐしまもしぐるしうおぼさる
どとくまいりまへなどはかぐしうものゝ後

ちをやしぐ。むをうへ。をもつて。かほハ人も心よは
くみてまつるもんと。おぼしつまぬましを
ゆらぬ。れ(ミ)そしこれ心ぐるしさまうけ。ゝ海くり
もちてぬやうまてなんまうで。ゆるめまて。れ文
たてまつる。めもみて。ゆらぬまうくりこゝお。ほせど
とひりまてなんとてこゝ。ゆどへハすつしうち
まうさることもやと。まちすぐす月日まそへて。いと
このびゝこれハわりなきわざまなん。いとけなき
人もいまとさひやりつ。もろともまとぐまぬ
おぼつるさと。いまはるをむりしれらこゝまるず
らへてもれしまへなどこまやりまうせまへり

文衣母初

勅書

内門 こやぞのつ程ゆきむすぶ風のをとに小萩(こはき)
がもとをさひこそやれどあれどえ見(まひ)ゆくてぞ。(文衣冊詞)いつ乃
ちながき此いとつらうおもふ事へ志るるに。松のね
もとんことぞまとづしうせ事へ侍れば。もとしぞ
よゆきかひ侍らんことにまして。いとはづかりおほ
くなすんがしこきおほをごとをとびくうけ海
そうちぞ。男づからはえなんせひ事へこゝろまじき。
わ(源氏)ゝ家(ミヤ)はいかにおもほしさるにか。まいりゆくこと
とのこなんおぼしいそぐめれば。ことゝりにかれ
しうそそてまつり侍らなどうらくにせ事へ家
さ海をそうしゆへゆうしきまにまとべれば。うく

やるおりしますもいまくしうかうじけるくなど
のまゝ宮（源氏）ハあほとのごもりまゝり。こゝそてまつりて（命婦詞）
くくしくれ（ミ）すさ海もそうし侍るまほしきをま
ちおくしますらんを。和（よ）ふけ侍りぬべしとていそぐ。
（主衣冊詞）くれまどふ心のやみもしへがたきかたしとぞこゝ。
くるくぐ（ぐ）りは宮もまほしう侍を。わるくしにも
心のどかまゝまでたまへどしごろうれしくれも
ごしきつゐでまてたちよりまし地とうゝ分
れをうそこまてこゝそてまつ。ゐてつれなき命
まも侍かれむまれし時よりおもふ心なりし人
まて。お大納（こざい）（なごん）でいまゝとなるまでしごけ人の宮（ゑ）づく

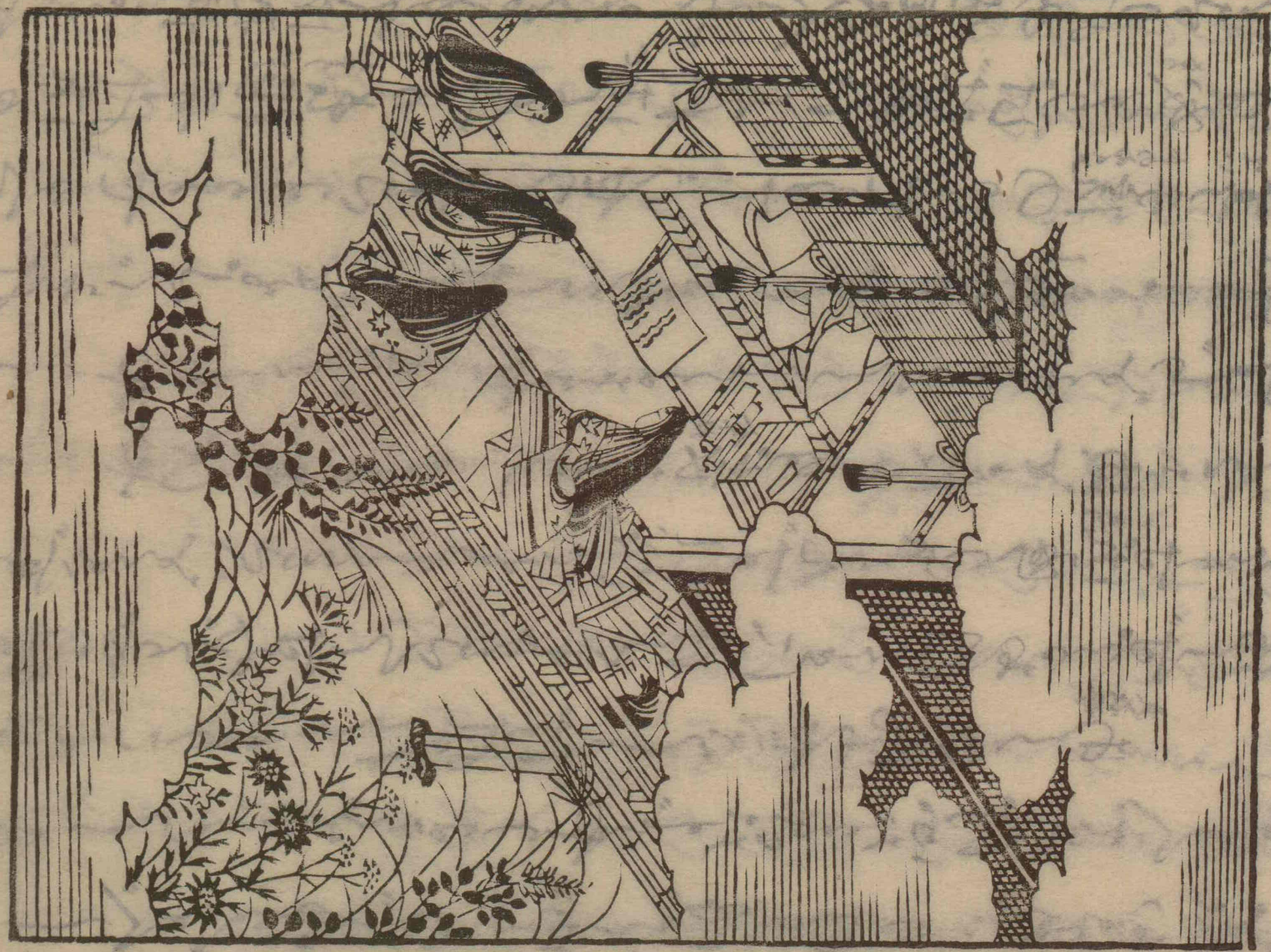
のかいうるしばとげさせてまつれ。弱(混)なくなりぬ
とそそらおしうせひくげおるなと。遠(久をく)いきめを
かれ侍しかばくらがくしうしろうしふ人なるき夜
じらひハ中くなりぬべきことおまふこまへなるぞ。
こぞかれゆいごむをこぞへじとぐらもまいぐし
こそ侍しを。身まほまもまでの出(三)ぎしれらろげ
まうこじけるきま人げるきたぢをくしつまじ
らひまふめりつるを。人のそねふくつまりやすら
ぬことおほくなりそひ侍ま。よのこと夜なるやうにて
つねまうくなり侍ぬれば。かへりてハつくくなん。かし
こき出(三)心ぎしをとふまへられ侍る。これもわりなるき

心のやこまなどいひもやらず。むをうへりのほどに
夜もかけぬ。うへもしかなん。わが此心ながら。あれ
令姫詞
がちに人めおどろくぐらりおぼされしも。なかなる
まじこさ成りとぞいまハつらかりける人のちぎり
になん。世にいたくかも人の心をまげしることハあら
じとおもふをたゞこれ人ゆへまて。あまるさか
まじき人のうしろをおひし。そてくいうこゝち
すてられて。心おさめむかたなきに。いとゞ人わろう
ゐるゝなりたゞもさされ世ゆしうなんと。
うら返しつれ志ほされがちにのみたくし
ますとうりてつきをぎなくて夜いたうふけぬ

れば・こゝろひすぐさずれかへりそうをんといそぎ海
いろ・月（菓子地之）へぐるの花（そく）さようすみわたれるまゝ・ぶ
いと涼（すゞ）しく吹（ふき）て・草（くき）村（むら）の虫（むし）のしゐぐもほし
がれなるもいとこちたるれまくさ草のもとなり
すゞ虫（令姫）のしゐのうぎりをはくしてもなぐさ
夜いのすゞふるなうぐれ・えものり（車之）やらず
いとゞしく虫（吏衣母）のしげきなげつま家をさ
そふる雲（くも）のうへへぐがとも申九つべくなんといけせ
ゐふおりしきれをくりもれなどあるべきおりにも
あしねばしゞれ形見（かたみ）よとてかるようもやとの
こしのへりけれさうぞくひとしぐり・ぬくし

あげのでうどめくねそへまふ（更衣母詞）わりき人ごうるしき
ことはさしにもいたぶ。内わらりを朝夕（あさゆふ）なしひて。
いとさうぐしく。（法門）うへの御ありさ夜などおもひいで
ゆゆれば。とくまいり給ちんことは。そのしゆ
様れど。くいまくしき身のそひてまつらんも
いと人きううるべし。まことそまつぞしばしも
あらんはいとうしろめたうさひゆへまて。すかく
ともえまいらせしてまつりたまはぬなりけり。命婦
（法門）くまぶお母とのごもしせしまはざりけるをいたれな
こしてまつる。おまへのつぼせんざいのいとおもしろき
御りなるを御らんずるやうなりて。悲びやうなかりしき

かぎり此女房四人さふらはをのて御把禮をさせ
ゐ殿かり此比あけられ御らんずる長恨哥此御恩
亭子院のうせゐて いせつゝゆきまよまゐせゐて
やまと云のくとも もろこしのうらをもしらぬそれ
すぢとぞまゐらしとまをさせゐ いとまゐやうま
ゐさ殿をとはをゐ衣なりつゝと思ひやうま
そうす御ゐりはらんずれば 奴詞 ともかしこさハとゝき前も
侍らずかるお目をどとにつけくもうきつ寸みぐり心ちあん
あしくさ風ゐせぎしかげ此れしよりこゝろぎ
かうへぞ志げ心なきなどやうまこぐりがたしき
と心おきあざりけるほどくはらんじゆるすべし



いとうしもみじとおぼしたげむれど・さらに
え思びあへさせ給ず・ぬんじりじめし年月
のことさへうきなりけめ・よろげにおぼしつゞから
れて・時のまもおぼつるまりしを・うくても月
日は色にそりと・あさましうおぼし給さる・
故大納言のゆいごむあやまるず・家づへのほいふ
うくもれしよりしよろこびはかひあるさ海に
とこそとひわたりつれ・いふかひなしやとうちの
こまたをて・いと気におぼしやるうくてもなの
づからわる家などおひいで給はゞ・さるべきほい
でもなりなん・命なるぐくとこそおもひねんぞめ

などのゆりまそうれをくりもれ(余ぬ)はんだきす。なき(九門心)
人のすそうこぐ。いでこりけんしのうんざし
なしましうげとおもほすもいとうひなし
君(法門ぶ)の(ゆく)けまばろしもがれつくにてもむ(くま)の河
まうぬそこにしるべく。ゑまうけう楊(やう)貴妃(きひ)のうち
そいそじきゑしといへども。箏(おで)うぎりなりそれぞ
いとりのかひなし。大液(えいえき)の芙蓉(ふよう)未央(びあう)の柳(やなぎ)もげに
うまひこりしうこちをうしめいしるよそひハうるハ
しうこそなりそめ。なるしうらうこげなりし
をおぼしいづるに。剣(とり)鳥(とり)れ(いろ)夕(いろ)のもねにもよそふべ
きうこぞなりき。朝夕(あさゆふ)のいとうきまゐ。をるべきを

はさむとちぎらせしまゝれいざりける命(いのち)の
ほどぞつきせずうらめしき風(ぜ)のをと出(せ)のみは
いけるものこゝろしうおぼさるゝ弘嚴(こうきぞん)殿は
くひさしうそのへの池(ミ)つゞみはもまうのゞりの
いぶ月のおもしろさまゝ夜ふくるまでなそびをぞ
しのなるいと(法門心)すきまじうもれしとさらしめす
此(このよろ)比の池(ミ)そしきなくてまつらうへ人めなるゞは
うるゝいたしとさくそりいと(地弘嚴殿ノ事)どしぶちかどく
しきゝ前もれしのふ池(ミ)なるまでことにもあらず
おぼしけちてもてなしのなるべし月もいりぬ
雲(法門も)のうへもなるぶはくるゝ秋(あさ)の月いです冬

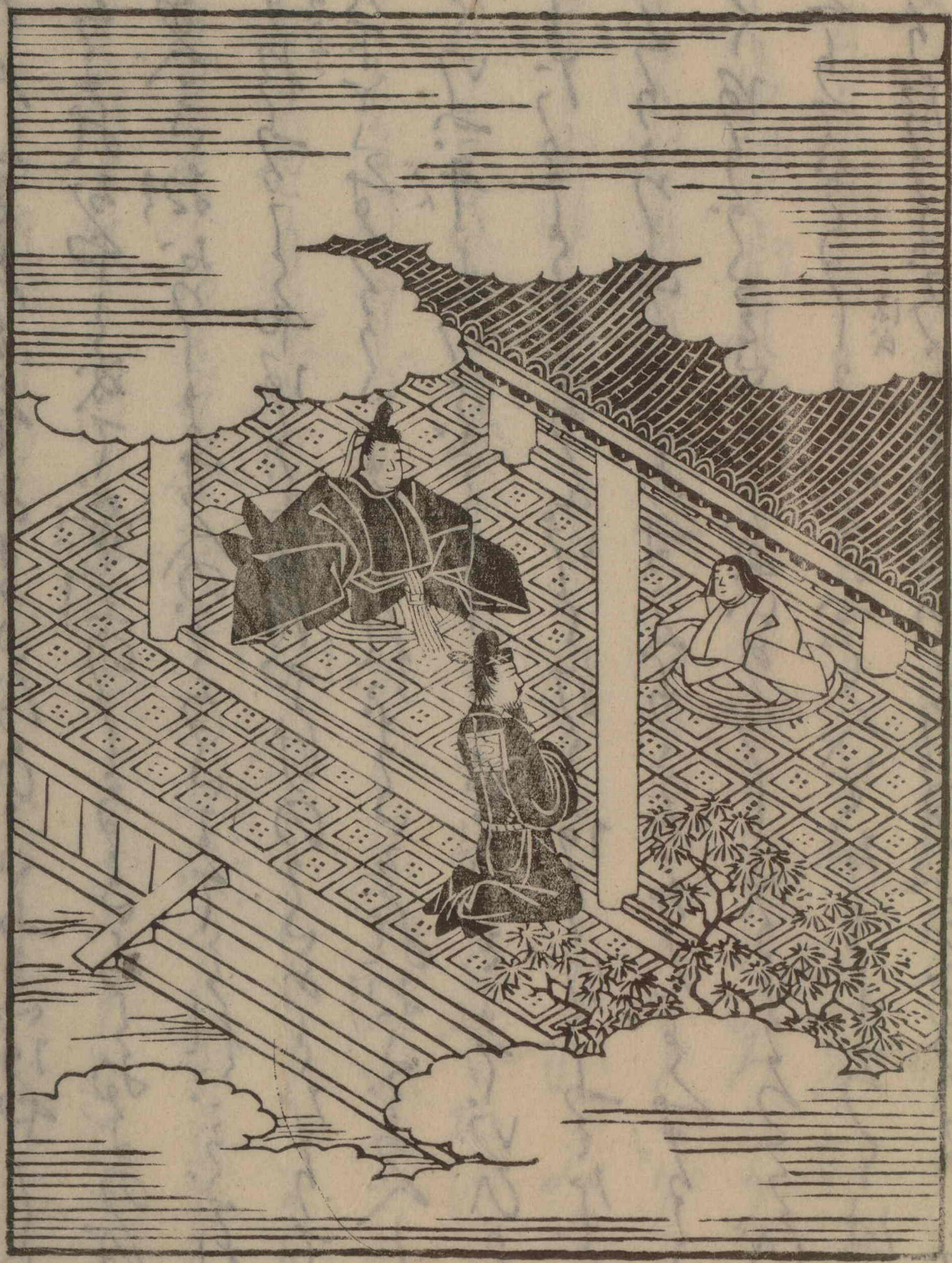
諸(しん)あさぢふの宿(やど)おぼし(法門心)やりつゝともしぶをう
ぶ法くしておきおかします。公(うえ)をのつきれとの
井戸のしる思ゆりいうし(丑刻之)まなりぬるべし。
人めをおぼしてよるれおとぐまいくせまても
まどろまませまことかたし。あしたまおきませまふ
とてもあくるもしらぐでとおぼしいづるまも程(ほを)あさ
まつりごとはまゝらせまぬべかめり。もれなども
きこしめさず。あさがれぬのそしきぞらふれさせ
まて。大床子(ざいしやうじ)のれもれなどはいとゝるまおぼし
めしられば。ぞいぞんまさふふかぎりは。心ぐるしき
れ(を)をしきをとてまつりなげく。すぎてちかう

さふらぎりはおとこめいとこちりるさわぎられ
といひけるをつるげくさらべきちぎりとそはれ
りしまりしそめそそられ人のそしつまうしをもはぐ
りしをゆりぎこれはことまふれさることをぞぞう
まをもうしなるせしまひいまはるく世のなられ
こしをもおぼしすてしさやうまなりゆくそいせ
ゑいぐしさわぎなりと人のみどのしめしまで
ひきいではくめきなげさなり月日為てわり家
まいりゆめいとぐこの世のおなしぎきよりまれな
すけゆえれば（はつ心）いとぐゆしうおぼししるも。つのくる
としのはる坊（ぎう 朱雀院）さるまり給はもいとひきこき海かし

うおぼをどれうしろこすべき人もなくまゝ世の
うけひくまじきことなれば中こゝろやうく覚しはぐ
りて父にもいゝさせおもてぎなりぬるをさばかり
おぼしこれどかぎりこそなりかれと世の人もさ
こえ（弘徽殿）めれもれこころおちゐぬのめかれおぼ（文衣母）小のゝ
なぐさむかゝるくおぼしたげこそ（文衣ノ）おいすしむ
取よぶまゝぐ日ゆんとねがひのしたりしは
やつゐようをのめればまゝこれをうしひ覚（おぼ）て
ことかぎりなしみこむ（源氏）はなり給（まゝ）としなれば
これ夜（ぞ）は覚しまりて遠（ひ）なるさのふ手（そ）比（ぢ）なれむけ
ひこさこしのへるをこそまつりをくらしひを

なん西くののひかう。いまはうらまのこさふらひの。
なくつよろりのへば。ふゝりじめなとときせのひて
世にしらずさとうかしこくおもすれば。あまりに
おそろしこさまで御給ぞ。今ハ御門司これもくえなく
えこまいじ。はゞ君なくてざまらうたうしのへとて。
弘嚴殿（こうさげん）なとふもわくしせのふれともまゝやがて
えすれうらにいれさてまつりの。いうじきものふ
あるかうさなりとも。えていうら思まれめべきき海
のしのへれば。えさしくるうたまいず。如御子（そんなミこ）こち
ゆる前。此御くしにおりしまをど。なずらひのべき
ぶまでなりけり。御うじもくれのかず。いまに

ゆきなりまめしうもづしげまおりすれば、いとおか
しうなりとけぬにつけてびぐさまされもくせひ
罪(きこ)もあり、わざとれはげくもんもさるもれまて
ことゆくのはまも雲井(くも)をひぐし、すべるいひけぐ
けばことくきうなるそぞなりぬべきひとのは
さはなりけるそれらこまうどのまいれるがなる
まうしこささうまんなりけるをきうしめして、
家のうちまめさむことはうぐのみうどのはいまし
めはれば、いろしうきのびて、これ(源氏)ここを鴻(こう)鵠(ろくん)は
つくしたり、はうしろこそらてつうまつる。
右大辨(ざいべん)のこれやうまおもしまてゐてこそまつる



ね人(きうまん)おどろきてあまたたびうちふきけやしふ
くまれおやとめて帝王(ていまう)のうちなきくらゐまのぼ
るべきね(きう)おりしますへのそうるまてこれにこぞれ
うれつてやほうんおほやけのうちめとなりて
天下(あめがしさ)をしすくるうちまてこれにまたそれね(きう)ぞふべし
といふ年(ごん)もいとぎしうしこうさくきまて いひ六
したりことぐもるんいとけうけりけるふしなぞ
つくりかりしてそふあすかうりなんとすまま
くはりがたきへまぬいめんしうまうろうび
かりてかうしうるべき心ぐへをおもしろくは
くりたるまみこ(源氏)もいとあれるかくをつくり給

へるをかぎりなうめでたくまつりて、いそじきを
くりものどもをさしげたてまつる。おほやけより
もおほくもれたまへ。とのづかしてひろぐりても
らきせあるほど、表宮のおほぢおとぐなどいかるる
ことふかしおぼしうらがひてなんなりけるみなど
りしこゝきは心にやまとさうをおかきて、おぼし
よりまけるすぢなれば、いまくてこのきみをみこまも
なきせあはざりけるをお人はまことよりこゝり
そりと覚しなきて無不親王の和戚のよせるまさまて
くたぐよはさじ。ゆゑは世もいとさぐめるまさをこそ人
まておほやけのはしろしをするなん。明さはも

それゆゑげるうてとくおぼしさだめて。いよくこゝろ
くのざしをなしはさせもまふ。さはてとまりしこく
なるさ人まはいとあらしそれど。みてとなりた
まひなぐ世のうるがひおひのぬべくもれしのへ。
すくえうれしこうきこゝろれ人まんがへさせのまも。
おるじさ夜まりをば。源氏（ぐんじ）になりしそてまいる
ぞくおぼしをさてしこう。年（とし）月まそへて。こや（文衣）
す前（どこ）のぶことをおぼしわすりおりなし。なぐ
さむやとさるべき人ごとまいしせのへど。なぎす
ひまおぼさるまだまいとうさき世かれと。うとま
しうのこよろづにおぼしなりぬるよ。先帝（せんてい）の

苔蘚
ほの家のれうちすぐれかへるまでしまくおく
しますはぎぎれよるくりしづきまでしまい
をうへまさかしぬ内侍のしけは先帝れ時の人
まてがれ家まもしうまいりなれたりそれだ
いたけるくおりしまして時よりそうそまつり。いま
もほのうそまつりて。うを給はしうや文衣すぐのれが
たちかくかへる人をこ代のうやづくへまつるたり
ぬるまえうそまつりつけぬまさいの家れひ苔蘚
君しそいとようおぼしるおひいでさせかへりそれ。
はりがうきかうちぐへまなんとそうしけるり。
れ門心
まつしとまやとれこころとまりて。ねんごろうり

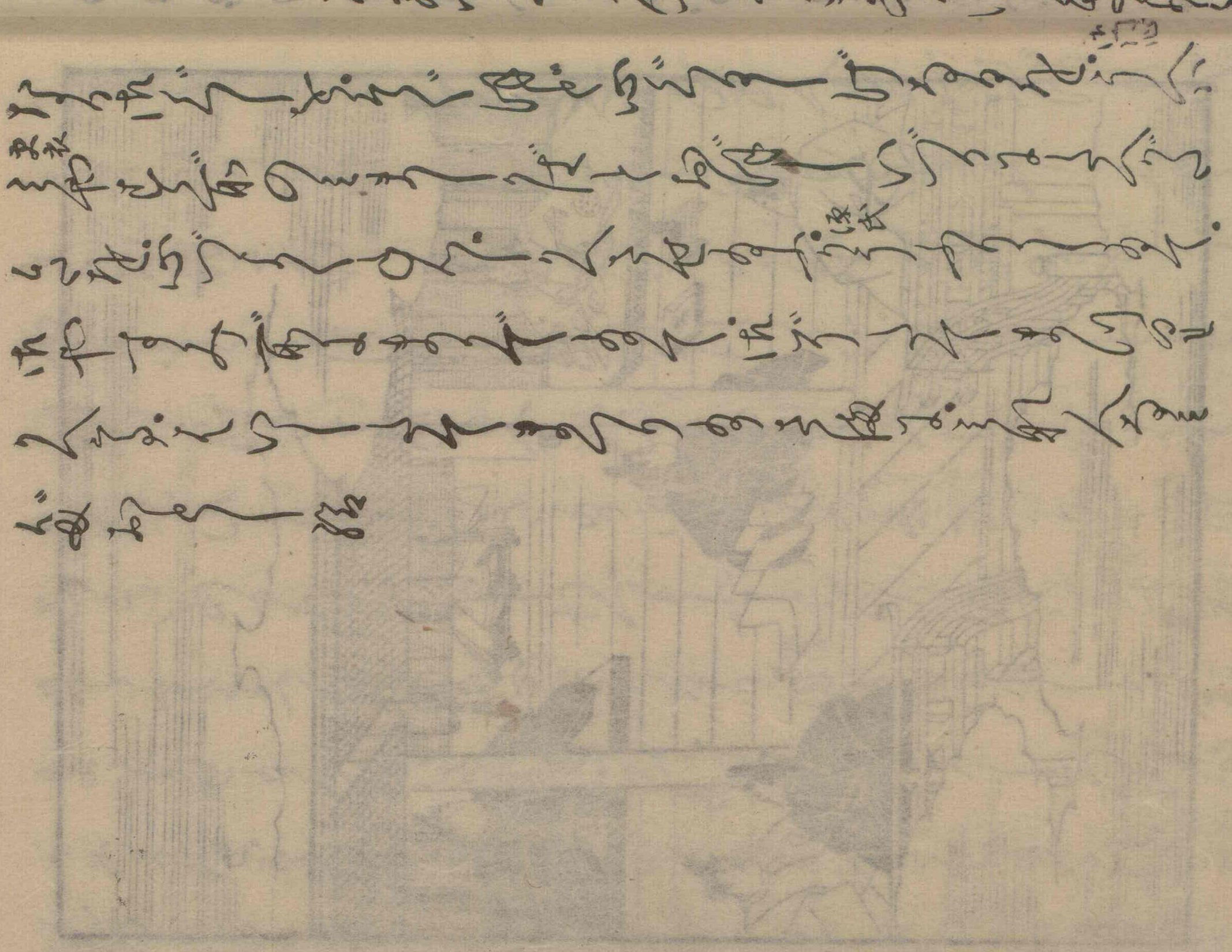
まさしさせまゐり。けぐさ記の何かおそろしや。
吉家（とうぐう）のぬれ（ねうご）のいとさぐかくて。さりつぐの更衣（ふ）の
あらさまさるくもてなされしたあしをゆく
しうとおぼしつゝて。すかくしうもおぼし
さぐりけるかどよ。さきさ記もうせのぬ。心ぼそき
さ海まておいしまゐすよ。ぐ（たつ）わが（そんな）めゑこゝちや
おなじつゝまゐひゆゑんと。いとねんごろまさそ
させたまふさふゝぬ人ぐ。れうしろゝこゝち。れせう
との兵部（ひやうぶ）のみこなどうく心ぼそくておいしまゐさ
んよりそうちずゝさせまゐて。れ（ミ）心もなくさむ
べくおぼしなりてまいりをしてまつりまゐり。おらぐ

つぐとさゝゆ。げはれくらつりさはあやしさまで
ぞおぼしめへる。これハ人のれさハまさりて。皆なし
めでたく。人もえおとしめ(きこ)ゆへのはねば。うけざり
てあるめるなし。かれ(夏衣ノ事)ハ人もゆるしきこゝざりし
はれ(こ)心ざしあやまくなりしぞ。おぼ(れ門心)しまざる
とはなれど。それづられ(こ)心うけろひて。こゝのなく
おぼしなぐさむやうなるもつくれるわざなり
かり。源氏(ゲんじ)の君(きこ)はれ(れ門ノ)あたりさりのもあをまして。
げくわたしせ給れるはえそぢあへのすぐいづれ
のれるもわれ人はおとゝんとおぼいたるやハある
とりぐはいとめでたくれど。うち(源氏)たとなるび

まゐるまゐ。いとわらうまつくしげまてもちまゐ
（茲臺）
くれのゝ。そのづらもりこそてまつる。（源氏 茲臺を）（源氏）
をゝ前ハかげざまおぼしのたまぬを。いとよろうり
のゝりと。内侍（なゐし）のをけのきこしかるを。わらきれ心ち
まいとゝのくれとおもひきこしのて。つゐまゐつま
ほしうなばさひこそまつらざやとおぼしの
（法門）うへもかぎりなきれせひどちまて。なのうとこのひ（法門詞）
そ。ゝやもてくよそへきこしつべき心ちなんする。か
めしとおぼさでらうたうしのへつゝきまみなど
ハいとよろうまゐりしゆへ。かよひてみしのもまげ
なしぎなんなど。アカつげこまゐれば。（源氏）わきなぞ

ちまもぢるまき（左）笠もみぢまつけても心ざしをこし
こそまつりこゝろまう心よりを聞しこまへれば。こゝろ
ぞんのめれまゝこれ宴（坂臺）ともれなりそばくしきゆへ。
うちそへそもともよりれまくさもこちいでゝ。おしと
おぼしこりせまこぐひるしとこゝてまつりまひ。
君（な）こゝろおいする宴（朱雀院）のれゝこちまもゝるをまかり
さはこゝとへんゝこゝるくうつくしげるる代世のひと
ひかる君（源氏）とアメゆふぢつがるしびまてれおぼしも
とりぐなれバかゝやくひの宴（坂臺）とアメ（きこ）程ごのきみ（源氏）の
れわゝはすぐこいとゝへまうくおぼをど。十二まてれ
元服（ゲンぶく）しまゐこちおぼしいとるまてかぎり何る

てもまことをそへさせまふ。ひとくをれ豊家の御元
服。南殿にて（紫震殿之）つりしごとしたるのよそほりしは
ひごとまをとらせまゐず。取々の餐なとくらづ
さごくさう院など。おほやけごとまつうまつれる。
とろそろうてもぞと。さりわきおほをごとなり
て。きよらをつくして。つうまつれり。おりしも（清涼殿之）
殿のひんぐしのひさし。ひぐしむきまいしきて。
くるんざれ御座。ひきいれの大臣の御座御前に
ありさうの時にて源氏まいりまゐ。みづらゆひまゐ
るつらつきうれのまほひ。さまかへまゐんことに
しけなり。大蔵卿くらきやうくらんつうまつる。いときよらに



みどくゝまして　えしのびあへ　ゆゑ　おぼしまさ
ゐおりもありつるをむかしのことさりへしるし
くおぼさるゝいとうくさびとるるかどハあぎをとり
やとうるゝはしくおぼされつるをつきましうそ
けくしげきそひゆへりひさいれの大臣（ごいじん）のみこゝろ
まだゞひとりしづきゆれむ（菱上）すめ　長家（とうぐう）よりもれけ
しきあるをおぼしわづらふことつりけるハこれ君（源氏）
まとてまつらんのれ心（ミ）なりなり内（れ内）まもれけしきた
まいしせゆゑれバさらばこれおりれれうしろみな
りめるをそひぶしまこも少くもよかさせゆゑれバさ（左大臣）
おぼしたりさふらひまゝでゆて人ゝおぼこうき

などまいりほどみこゝらは此座のすゑに源氏つ
きのへり。おしゞ（左大臣）にしきぞこゝ中の給ことあれど。もれく
つましきほどにてどもかくもなへ志しひこさて
ありず。おまへより内侍宣旨（ないしせんじ）うけし後ハりつゝへて。
おとゞまいりのべきめしなれバまいりす。此ろくの
もれ。うへの命婦（みやうぶ）とりてこまゝ志ろきおほうち
きに此ぞひとくぐりれいのことなり。此さらば
きれつゐぞるに

いときなきさしもとゆひになぐきことをちぎ
る心ハむせびこゝめりや此ころぞへなりておどろ
きなこのよ

左大臣

左大臣
むさびつゝふもふるさもとゆひにこゝさむし
さきれ気しあをずハとそうしてなぐりしらを
おりてぶたうしまふひぐりのつゝれれむまゝら
人どころのたゝすへてたまいりしまふこはし乃
もとまみこちらんぐちめつゝそろくどもしる
ぐまゝ海ちりのふそれ日のれまへのおりひつもの
これなど右大弁（うざいべん）なんうをゝ海ちりてつゝうま
つゝをけゝとんじこゝろくのかしひはどもなどと
ころをさまぐで去家（とうぐう）の御元服（がんぞく）のおりにもりずまのさ
れり中くりぐりもるくいゝめしうなんそれ程
左大臣
おとぐのれさとまゝ源氏（ゐんじ）のさゝまゝでさせしまふ

さほうよまめづらしこさまぞもそうしづき四九の
へりいとこさびもまでおりしうるをゆくしうこゆ
くしとせひこさてしめへり。め君ハすうしすぐし
のへるほどまいとわうおりすれバまげなくくらげ
うしとおぼいたりこれおとぐのれおぼしいとやむ
ごとるさまはしこや肉のひとりこさきいぐらま
なんおりしかれバいづるまつけてをもれあぎや
うへかまこれ君さへかくおくしそひぬれバ長文
のれおほぢまてづゐまは世中をしりのべき。右乃
おとぐのれいさほひハものまもはしずおされのへり。
れ子どもはまるならぐまもれしのふ。こや乃れ

源氏十二
蓬上十六
蓬上心
左大臣
左大臣
牙崔院
蓬上ノ北母

そまゝそれ中将と云こ

ちゝハ、ぞ人のお将にていとわうおうしきを、去
のおとゞの中(なか)はいとゝうるほど、えこそすぐしゐハ
ぞ、りしづきゐふ、宮の君にはなれ世のみ、おとゞ
もてりしづきゐるは、あるまゐしきれなくひど
もなかん、源氏の君にうへ(九門)のつゐよめしまれ世
ば、こゝろやすくさとずこもえしのり、心(源氏心)のうち
にはこゝかぢつゞのれありさ面をしぐひるしと
ちひ申てさやうなりん人をこそこめ、まゐひと
なくもおりしけるか、おほいとの君(菱上)いとおりしげよ
りしづれる人とはこゆれど、こゝろにもつゞおほ
えゐて、おとゐきれどのれひと人ごゝろにうり

て。いとくるしきまでぞおりしける。おとゝなる
ものてのちハありしやうにこそすれうちにも
いれぬりぞ。ゆ(こ)あそびのおりくごと笛(ゆえ)のゐまこさて
まひ。ほのゝるゝれこゝ忌をるぐさめまて。うちず
このゝこみましうおぼしのふ。又六日さふらひの
ひこる。おほ(た大臣)いとのに二三日なれど。しくまゐで
しまへどしぐいまハおとゝるゝきゆほどにつみなく
おぼして。いとなまうしづき四九のふゆるぐの人ぐ。
世の中にをしなべしめをえりとくのへまぐ
まてさふらりせしまふゆ(こ)心につくべきゆ(こ)あそび
しおほかくおぼしいらづ。内(内裏)にはもとれ

（相臺）しげいさを出ざうしまて。（主衣）はこやもと前の御
りこぐの人ごまりぞちらぜ。さふらはせこまふ。さ
（二条院）との殿（との）ハ修理職（しゅりしき）にくミづきに宣旨（せんじ）くだりする。
はなうあらためつくせのふ。もとの末ざち山
のこずまひ。おもしろきところなるを。いけ
のころひろくしるして。めでたくけりのし
（源氏心）かりとしろはおもふやうなん人をもへる
すまだやとのミなげりしうおぼしわたり。ひゝ
かきみといふ君ハこまりどのめできこえて。
つまにてまつりけるとぞいひつゝへ
こゝ。
なん

69038
6AP78